



TITLE:

第2回「デザイン学論談」レポート

AUTHOR(S):

太田, 裕通; 佐藤, 那央

CITATION:

太田, 裕通 ...[et al]. 第2回「デザイン学論談」レポート. デザイン学論考
2016, 5: 33-35

ISSUE DATE:

2016-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218173>

RIGHT:

第2回「デザイン学論談」レポート

日 時 : 2015年10月13日 16:30~19:00

場 所 : 吉田キャンパス デザインファブリケーション拠点

参 加 者 : 8名

教員: 富田、山内、平本、北

学生: 太田、佐藤、水野、小東

文 責 : 太田 裕通、佐藤 那央

京都大学デザイン学大学院連携プログラム1期生

デザイン学論考の執筆者と読者が、その内容をより深く議論するための場として設けられたのが、本「デザイン学論談」である。第2回目今回の今回も、デザイン学論考の執筆者4名が話題提供し、それを元に自由かつ緩やかな雰囲気の中、濃厚な議論が展開された。以下に各発表者の発表概要を記す。



富田 直秀先生（工学研究科機械理工学専攻）

富田先生の発表は、先ずこれまでの工学の限界を指摘するところから始まった。つまり、＜仕様→設計→設計解＞というプロセスにおいて、その前後にある『生活』との繋がりが欠如しているのではないかということである。それを踏まえて、富田先生は自らのデザインの定義を＜生活－仕様－設計－設計解－生活＞の一連の流れであると言う。また、既存のQOL指標の問題点を指摘し、「麻薬を使えば痛みは無くなるのでQOLは上がる？」という例を挙げ、倫理面、常識面が考慮されたQOL指標に刷新する必要性を強調した。そこで、方法論として記号過程（実体－記号－解釈項）を導入し、「人体－QOL評価－医師・患者」というモデルで捉えることでその問題点を乗り越えようと提案した。すなわち、

主体性を考慮した学理を作り上げることが今後の課題であると語った。その後の議論では哲学的な立場（認識論 or 存在論）に関する問い、具体的な医療現場や生活者側からの捉え方に対して議論が行われた。

関連原稿：生活の質（QOL）のデザイン（vol.4）

平本 毅先生（経営管理大学院）

平本先生の発表は、コミュニティはデザインできるか？という問いかけの下、デザイン対象を厳密に定義する必要があるか、という「デザイン学」にとって大変興味深いものとなった。周知の通り、「コミュニティ」という言葉はバズワード化しており、一つに定義することは困難である。しかし、平本先生は専門であるエスノメソドロジー、会話分析の理論を引き合いに出し、人々が厳密な定義がなくともこの言葉を使うことができるという事実に着目する。そして、人々が日常生活の中でこの「コミュニティ」という言葉を用いる実践を観察するところから、デザイン方法を確立していくことができるのではないかと主張された。この、曖昧な対象を曖昧なまま扱うという姿勢は、京大が目指すデザイン学において示唆的であり、オーディエンスからも共感の声が上がった。また、厳密に定義できないからといって立ち止まるのではなく、実践の中でこの概念がどう使われているかを見るところから新しいデザインについて考える一歩を踏み出すべきではないか、という意見は「デザイン学」を学ぶ我々を勇気付けるものであった。

関連原稿：コミュニティのデザイン（vol.4）

太田 裕通君（デザイン学1期生／工学研究科建築学専攻）

『建築都市デザインの評価におけるAHPを用いた個人による意思決定の可視化に関する手法的試み』と題された太田君の発表では、デザイン評価の曖昧さとその共有の困難さという、自身の問題意識を基にした取り組みについて報告した。建築学を専攻する太田君は、デザインコンペ等のデザイン評価の場において、言語化の困難さや時間的制限の結果、評価者一人一人の頭の中でブラックボックス化し、外部者にとって非常に分かりにくくなっていることを経験的に指摘する。そこで、AHP（階層的意思決定プロセス）を導入し、評価者の意思決定を可視化する本取り組みを着想し、2014年度の京大建築学専攻卒業設計講評会にて、実際に開発したツールを用いて検証を実施された。本発表ではそこから得られた知見として、デザインの評価軸の可視化がある程度可能である

こと、さらには、既存の規定による評価との作品評価順位のズレ、そして本ツールにて評価基準を細かく設定することによって、評価者の無意識があぶり出される可能性について言及し、オーディエンスの関心を強く惹いていた。特に本ツールについて、富田先生は自身の発表で述べたQOLの評価に使えるのではないかと、今後のコラボレーションの可能性も示唆された。一方で、ディスカッションでは自身のリサーチクエスションと結果との整合性や、既存の評価規定による結果とのズレなど、得られた面白いデータについてより魅力的にプレゼンできるのではないかと、という意見も挙がった。そんな指摘も含め、今後が楽しみになる発表であった。

関連原稿：デザイン評価における意思決定のモデル化と可視化に関する考察 (DCS
論考I) - 2013年度京都大学建築学科卒業設計講評会を事例に - (vol.2)

佐藤 那央君（デザイン学1期生／情報学研究科社会情報学専攻）

『○○○○のデザイン』と題して、佐藤君自身がこれまで関わり続けている京大病院の院内学級での体験をデザイン学的に解釈するような発表であった。具体的には高校生への学習サポートを始めた経緯から、「デザインの問い」として学びの場、協力体制、既存の制度などを抽出して、現状の問題点を挙げ、自身もボランティアというレッテルから深く踏み込みイノベーションを起こせないジレンマなどを語った。質疑では、山内先生より高校生学習での気づきについて聞かれ、「彼らにとって、学習とは遅れを取り戻すためのものではないことが分かった」と語り、体験の中から実感の伴った気づきを語った。それについて富田先生は「病院は病気を治すところ。生きるために生きさせられる場所である」と語り、佐藤くんも「医療体制が身を守るために院内学級の優先順位が低い医師もたくさん居り、イノベーションは難しい」ことの実感を語った。

関連原稿：『社会のデザイン』への挑戦 (vol.3)
